Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University: Curriculum and Teaching No.33 (1999) 1 -15

書道の授業における鑑賞活動導入に関する一試行
― 高等学校の「仮名」単元を中心に ―

鈴木　慶子*1　　鶴谷　和身*2　　和田　圭壮*3

（平成11年３月15日受理）

A Method for Introduction Appreciation Activities in Japanese Calligraphy Class
" The Case of Kana Unit in high school "

Keiko SUZUKI, Kazumi TURUTANI, Keiso WADA

(Received March 15, 1999)

第１章　本研究の概要

第１節　本研究のテーマ

本研究は，上記３名の共同によって進めた。３名は，それぞれ立場が異なるが，書道の教育に関わっているという点で共通している。そして，書道の授業には，自分自身が行うものを含めて，多くの改善すべき問題が含まれているということを，共に認識している。

その共通認識に立ち，それぞれが抱える学習者がより主体的に「学ぶ」ことのできる書道の授業を創り出すために，以下の３点から改善を試みた。そして，学習者が生涯に渡って書を愛好していく基盤を，授業を通して培っていこうと考えた。

① これまで，表現中心・実技一辺倒であった授業展開の中に，鑑賞活動を効果的に取り入れる。

② 学習者が技法を習得する場合にも，教師が教え込むのではなくて，学習者自身が発見したり，考えたりという活動を取り入れる。

③ 鑑賞活動と表現活動を連動させることで，学習者が成就感を持つことのできる授業を組織する。

なお，本論は，「『教える』から『学ぶ』へ　―鑑賞活動の活性化による授業改善―」（『書写書道教育研究』第13号　全国大学書写書道教育学会編　1999. 3）と連携し，それを補完するものである。すなわち，「『教える』から『学ぶ』へ　―鑑賞活動の活性化による授業改善―」では同様のテーマのもとに大学における実践の検証を中心に報告しているのに対して，本論では高等学校における実践の検証を中心に報告することとした。

---

*1 長崎大学教育学部国語教育講座　*2 純心女子高校　*3 福岡教育大学教育学部美術教育講座

第２節　テーマ設定の理由　―問題の所在―

１．鈴木の立場から

鈴木は着任以来，本学部教員養成課程にふさわしい書写書道カリキュラムの運営について考えてきた。

本課程は，小学校教員養成と中学校教員養成を本務としている。その中で，高等学校芸術科書道免許の課程認定を受けて，そのために必要最低限の書道関連の授業科目を開講している。

また，本学部同様に，高等学校芸術科書道免許の課程認定を受けている教育学部教員養成課程では，ほとんどがこのような形を取っており，専任１名と非常勤講師によって３免許に対応する授業を賄っている。このような状況の中で行われている授業を散見すると，担当者自身の教育観にもよるが，該当する教職の専門性を十分に生かしたものになっていないことが多い。

このことを少しでも解決しつつ，それぞれの教職の専門性を生かした書写書道の授業を行うには，専任のコーディネートと，非常勤講師との分担，連携，及び協力が必須となる。この考え方にもとづいて，これまで鈴木は書写書道カリキュラムの改訂を行ってきた。続いて，それを有効に運営していくために，授業の担当としては，原則として，鈴木が小学校，中学校免許関連の書写の授業科目を担当し，非常勤講師には高校書道免許関連の書道の授業科目を担当してもらうこととしてきた。

本論では，非常勤講師の和田が担当している高校書道免許用の「仮名書法」を対象とし，共同して授業の改善を行うこととした。その意味で，本論は，鈴木がこれまで行ってきた小学校，中学校免許関連の書写の授業の改善に関する研究と連続している。

２．鶴谷の立場から

鶴谷にとって，これまでの書道の授業における「改善」とは，あくまで「いかにして，学習者により良い作品を書かせるか」「教師が，いかに効果的にその技術を与えるか」という書技の向上を絶対視したものであった。このように考えていた理由は，良い作品を書くことがそのまま「書を愛好する」ことにつながるものと思い込んでいたからに他ならない。

しかし，高等学校の現場を見ると，選択科目として履修しているにもかかわらず，字を書くことが好きではないという生徒も少なくない。また，小学校以来の練習の成果か，技術的には高いものを身につけてはいるものの，「書道（あるいは芸術一般）」に対して，ほとんど興味や関心を示さないという生徒もいる。こういった学習者を前にし，「書道」の授業が，単に「作品制作のための技術的な練習の場」としての意味しか持たないのであれば，そこから，「書を愛好する」ことにつながることはほとんどありえないと自覚するに至った。

３．和田の立場から

和田がこれまで福岡教育大学書道科（高校書道教員養成）で行ってきた授業では，実技力の向上を第一の目標にし，その目標の達成のために「徹底的に書く」という内容及び方法を良しとしてきた。（このような授業が，福岡教育大学書道科の学生にとって，妥当か否かの判断は別として。）

そのような環境で，自分も鶴谷も育ってきたし，書道の授業というものはそういうもの

だと思ってきた。今の書道科の学生もそう思っていると疑いもしてこなかった。

しかし，現在，非常勤講師として出講している長崎大学（主として小・中学校教員養成）での高校書道免許取得のための授業においては，「徹底的に書く」という実技一辺倒，練習至上主義の内容及び方法が，必ずしも適切とはいえないことを痛感した。そこで（福岡教育大学書道科とは，教育目標及び，カリキュラムの異なる）長崎大学の学生にとって，学習者としての喜びが得られるような，また，将来にわたって書を愛好していけるような授業の必要性を自覚した。

第３節　本研究の役割分担

和田は，主に，長崎大学における副免としての高校書道免許用の授業「仮名書法」（演習・１単位・３，４年次生受講）の計画及び実践を行った。

鶴谷は，和田の先行実践を踏まえ，主に，純心女子高校普通科における授業「書道Ｉ」（１年生選択者対象）の計画及び実践を行った。

鈴木は，主に，本共同研究全体の企画，調整，総括を行った。

なお，高校での授業は，原則的には大学での先行授業と同様のものとしたが，対象とした「仮名」領域の学習に費やす時間数や，学習者の発達段階，学習環境等の違いを考慮し本研究のテーマを逸脱しない範囲で，授業者が実状に沿うよう変更した部分も多い。

第４節　授業成果の分析方法

本研究では，授業の成果の分析を下記のように行った。

すなわち，後述するそれぞれの授業展開の中で学習者が記述した鑑賞文（自由記述）の内容を，以下の観点から分析し，その出現率を算出した。

〈鑑賞の観点〉

「実技性」…「書きにくそう」「書きやすそう」等の類の記述。
（自分自身が書くという立場）

「事実性」…「字が小さい」「墨が濃い」「行間が狭い」等の類の記述。
（客観的に紙面に表れている事実を捉えるという立場）

「判読性」…「読める」「読みにくい」等の類の記述。
（紙面の文字を判読しようとしている立場）

「連想性」…「ゆったりしている感じ」「女性が書いたよう」「泣いているみたい」等の類の記述。
（主観的に，想像力をはたらかせイメージを広げようとした立場）

「発見性」…「直観で感じていたとおりに軽やかだ」「直観的に感じていたよりも力強い」「他の人が言っていたことは，このことだったのかと思い当たった」等の類の記述。
（臨書後に，再認識や新発見をしたという立場）

第２章　鑑賞活動を契機とした授業の実践（長崎大学）

第１節　和田による授業［仮名書法］

１．授業テーマ「規範的仮名古典の鑑賞と表現」

２．授業テーマ設定の理由

受講生は，教育学部小学校教員養成課程国語選修生，及び中学校教員養成課程の国語専攻生である。カリキュラム上すでに，「小学書写」や「書字研究」「中学書写Ⅰ」「中学書写Ⅱ」を受講しており，手書き行為の意義や書写・書道という毛筆文字文化への興味を持った学生が受けている。しかし，高等学校時代に書道を履修している学生は，１～２割程度である。したがって，この「仮名書法」は高等学校芸術科書道の免許取得のための授業ではあるが，まず，書道の基礎的な内容を中心に扱い，幅広く書道について興味・関心を高め，生涯にわたって，書道を愛好する心情を育てることを目的とした。

今回の仮名古典の学習において，教材としては高等学校書道科教科書に必ず登場し，比較的に特徴が発見しやすい，高野切第一種・高野切第二種・高野切第三種・関戸本古今集の４種を扱うこととした。

次に，授業に際しては，鑑賞及び表現の学習を通して学習者が自ら発見し，互いに啓発しあい，さらに高まろうとする意識を引き出しつつ，書に親しんでいこうとする心情を育成できるようにしたい。

３．授業の目標

① 鑑賞の意義を理解する。
② 鑑賞によって各古典の情感を味わい，特徴を理解する。
③ 臨書によって各古典の技法の特徴を実感し，鑑賞を深める。
④ 創作において，個々の思いが表現できるように工夫する。
⑤ 仮名の美を理解し，書を愛好する心情を持つ。

４．授業の全体計画

	表現	鑑賞	記録	活動内容	授業回数
第　1　回				・仮名概説（仮名の発生と発展）	1
第　2　回	○			・仮名の基本的筆遣い	1
第３～６回	○			・単体　－平仮名－　－変体仮名－	4
第７，８回	○			・連綿	2
第　9　回		◎	○	・古典の鑑賞（第１次）	1
第10～13回	○		○	・高野切第一種，二種，三種，関戸本の臨書	4
夏期休暇	○			・課題：４種の古典の臨書	
第　14　回	○	◎		・古典の鑑賞（２次） ・短冊への臨書	1
第　15　回	○		○	・短冊への創作	1

5．鑑賞を契機とした授業（第9回）の展開

（1）目標

① 鑑賞の意義を理解する。

② 直観的鑑賞によって古典の美を味わう。

③ グループでの話し合いに積極的に参加して，鑑賞を深める。

（2）展開

学　習　活　動	時間
1．鑑賞の意義を理解する ① 「感じる」ことについて ② 好き嫌いについて ③ 感動することについて ④ 人によって感じ方が違うことについて ⑤ 感じるための条件について	20分
2．4種の仮名古典の鑑賞をする ① 4種の仮名古典の直観的印象を文に書く ② 同古典から好きな古典を選ぶ ③ 好きな理由を書く	20分
3．直観的鑑賞を発表する	20分
4．4つのグループに分れて古典名を探る 5．古典名決定の根拠を話し合う	20分
6．グループ毎に古典名とその根拠を発表する	10分

（3）評価

① 鑑賞の意義が理解でき，鑑賞活動に積極的に取り組むことができたか。

② 直観的鑑賞によって古典の美を味わうことができたか。

③ グループでの話し合いに積極的に参加して，鑑賞を深めることができたか。

④ 表現への関心を高めることができたか。

＊なお，4種の仮名古典とは，「高野切第一種」「高野切第二種」「高野切第三種」「関戸本古今集」である。いずれも，平安期の規範的な仮名美を有する書跡である。

6．鑑賞の観点別分析結果

（1）臨書前後の比較

図1　長崎大「仮名書法」臨書前

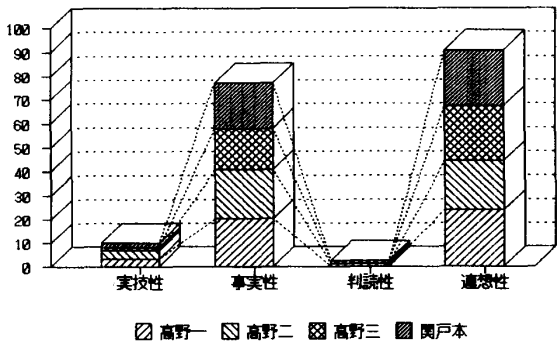


図2　長崎大（仮名書法）臨書後

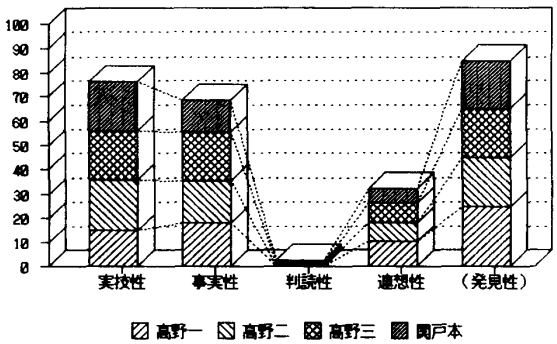


図３　臨書前後の比較(長崎大「仮名書法」)

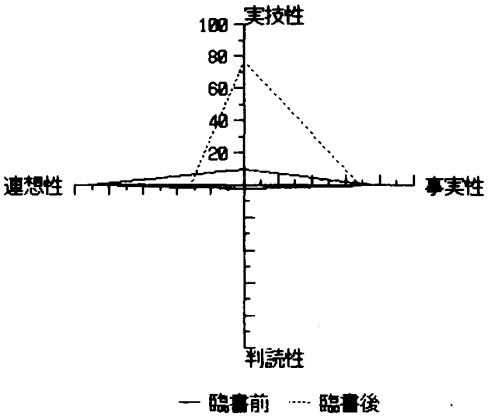
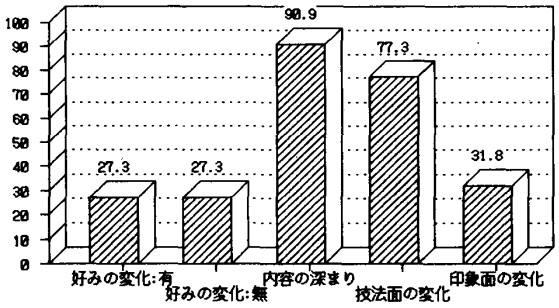


図４　臨書後の変化(長崎大「仮名書法」)



［図１］…第９回の授業での「学習活動２」における学習者の自由記述を「鑑賞の観点」別に分析し，グラフ化したもの

［図２］…第14回（臨書終了）の段階で，同様に「鑑賞の観点」別にグラフ化したもの

［図３］…臨書前後の「鑑賞の観点」の出現率の変化を示すもの

［図４］…第14回（臨書終了）の段階で，自由記述による学習者の感想の変化をグラフ化したもの

（２）鑑賞活動導入の意義

・発見性の現れ…臨書後に気付いたことが多い。このことを鑑賞が深まったためであると解釈する。

・臨書活動による変化…臨書後であるので，当然，実技性に目が行くことは理解できる。反面，連想性が，著しく低下している。つまり，連想性に分類されるような「想像力を働かせた鑑賞」は，臨書活動の前にこそ充分なされなければならない。

・仮名を見る目の変化…臨書を経験した後であるため，技法面での見る目の変化は当然予想できるが，その予想を上回って，鑑賞の深まりが見られた。鑑賞活動と臨書活動の相互作用の効果と考えられる。

第２節　鈴木による比較授業

前節に示した和田の授業成果の要因を分析するために，鈴木が担当する授業において，以下に示す内容で「感じ方に関する調査」，及び「実験的授業」を実施した。

１．感じ方に関する調査［小学書写クラス］から

（１）目的：①「鑑賞」の意義付けを行わない場合は，どのような反応が見られるか
②グループによらず個人の活動だけで行う場合は，どのような反応が見られるか

（２）対象者：小学書写（３年次生）受講生

（３）実施方法と内容

授業者の「鑑賞」への思い入れが伝わらぬよう，調査スタッフによる「調査形式」とした。また，グループ学習という様な形態をとらず，全て個別活動とした。

（４）集計結果（次頁［図５］参照）

［図５］…「感じたこと」に関する自由記述を，「鑑賞の観点」別に分析し，グラフ化したもの

2．実験的授業［入門科目･国語］から

（1）目的：和田の「仮名書法」第9回の授業と同様の授業展開によって，成果を比較対照する。

（2）対象者：「入門科目・国語」（長崎大学教育学部の1年生を対象とし，各分野の専門教育科目の紹介と導入を目的とする）の受講者

（3）授業方法：和田の「仮名書法」第9回の授業とほぼ同様の授業展開

（4）集計結果（［図6］参照）

［図6］…［図5］の集計方法と同様。

図5　長崎大「小学書写」

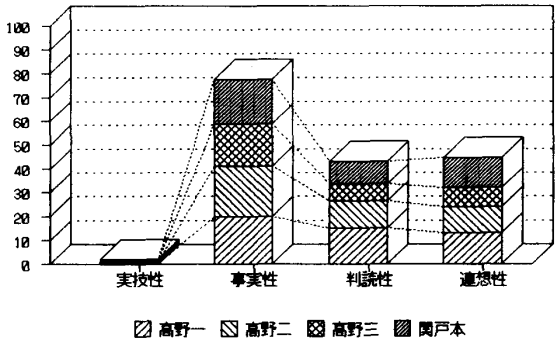
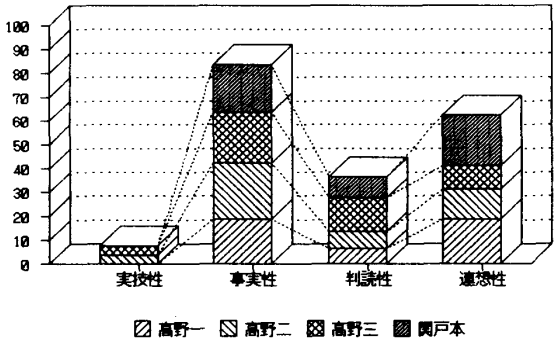


図6　長崎大「入門科目」



第3節　授業成果の考察

1．鑑賞活動による意識の変化（［図7］参照）

［図7］…和田の「仮名書法」の第9回と，鈴木の「入門科目」の鑑賞活動終了時に，自由記述による学習者の感想をまとめたもの。なお，項目の内容は，以下の通り。

「差の認識」：同じ古典でも人により，捉え方，感じ方の違うことに気付いた

「他との共感」：他者の印象を聞いてなるほどと思った（共感した，納得した）

「話し合い」：話し合いを授業に導入したことは意義深いと思う

「鑑賞肯定」：「鑑賞」に興味がわいた。意義深さを感じた。等，鑑賞活動に肯定的な内容

図7　話し合いの意義（長崎大）

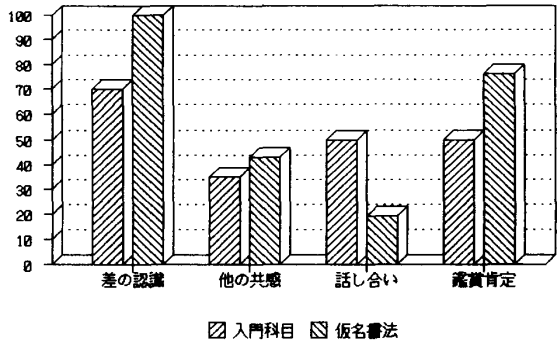
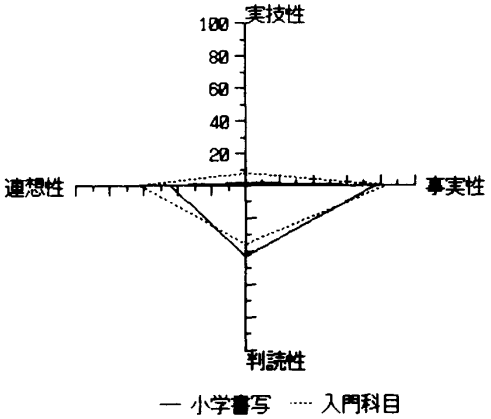


図8　長崎大（2クラス比較）



2．鑑賞の意義付けや，話し合い活動導入の効果（前頁［図８］参照）

［図８］…「入門科目」「小学書写」の「鑑賞の観点」別出現率を比較したもの

書道実技の授業に対する経験という意味では，仮名書法クラスに比較して，入門クラスと小学書写クラス共に低い。ただし，小学書写の授業は，小学校国語科書写の学習指導に対応するためのものであり，毛筆を使用した実技には多少の意図的な学習経験がある。しかし，鑑賞の視点を比べると，小学書写は「判読性」が高く，入門科目では「連想性」が高い。この結果からも，授業者による「鑑賞の意義付け」や「話し合い活動」が導入されることにより，文字を「読むこと」に拘らず想像力豊かな鑑賞がなされたことが分かる。

第３章　鑑賞活動を契機とした授業とその記録（純心女子高校）

第１節　鶴谷による授業

1．単元「仮名の鑑賞と表現」

2．単元設定の理由

二学期に入ってからの「仮名」領域では，平仮名の単体や，連綿の練習を通し，基本的な筆遣いを学習した。併せて，知識面では，仮名文字成立の歴史と，それに伴う変体仮名について学習した。もっとも，変体仮名については，その位置づけを学んだにとどまり，個々の変体仮名について，その字形を覚えたり，実技面での練習をしたりということはしていない。しかし，変体仮名の存在を意識することで，多少は，「読めない」ということへの抵抗感は薄らいでいると思われる。すなわち，「今の段階の自分達には読めなくても当然」というある種の開き直りの気持ちが生まれ，それによって，「読むこと」に固執せずに，鑑賞がなされるのではないかと考えた。その上で，（鑑賞対象としての）古典や自他の作品を通して，「客観的事実（字形，墨量，線の太細…等）をとらえること」だけにとどまらず，その背後にあるものを「感じること」の面白さを実感，体験させたいと考えた。

従来の鶴谷の授業では，この「感じること」の内容を言葉を尽くして「説明」し，それに関連させて，強引に「臨書」へとつなげていた。

今回は，生徒自身から「感じること」を引き出し，それを生徒相互の話し合いのやりとりの中で更に深めてゆくことを期待し，鶴谷は，それを促すような姿勢で授業に臨むこととした。本研究は，この段階の授業をより効果的なものとするための一つの試みとしての取り組みである。

また，それに続く，仮名創作（散らし書き）では，創作作品が，単に「表現技術」を競うものではなく，自らの「感じること（思い）」を形として現したものであるということをも実感させたいと思う。

3．単元の目標

① 仮名古典鑑賞の意義に気付く。

② 仮名古典を自分なりに鑑賞し味わうことができる。

③ 仮名古典の特徴をとらえた臨書をすることができる。

④ 自分なりの思いを込めた創作表現を目指すことができる。

⑤ 仮名古典の鑑賞と表現を通して，書を愛好する心情を持つことができる。

⑥ 自ら学ぶ姿勢を身につけることができる。

4．単元の全体計画

・仮名の基礎…… 仮名成立の歴史と変体仮名 … 1時間
小筆の扱いと単体の練習 … 1時間
連綿の練習 … 1時間

・仮名古典の鑑賞と表現… 仮名古典（3種類）の鑑賞 … 1時間（本時，次項参照）
臨書（1種類を選択） … 2時間
仮名創作（俳句の散らし書き）… 2時間

なお，3種の仮名古典とは，「高野切第一種」「元永本古今集」（高野切第二種系）「粘葉本和漢朗詠集」（高野切第三種系）である。

5．本時の学習指導計画（鑑賞活動を主とした授業）

（1）目標

① 鑑賞の意義に気付き，仮名古典の美を味わうことができる。
② 各古典の印象の違いに気付き，自分の言葉で表現することができる。
③ 生徒相互の力で鑑賞を深め合うことができる。

（2）展開

学習活動	教師の活動	時間	要素
1、鑑賞の意義確認 ①「読む」ことと「感じる」こと ②「好み」について ③「鑑賞」の姿勢	○書の古典や作品は，必ずしも「読む」為だけのものではないことを話す。 ○（特に「好み」など）人による感じ方の違いがあって当然であることを確認 ○1学期に扱った「鑑賞」で，古典を見て「かたい」とか「あたたかい」とか感じた根拠を考えてみるよう促す。 ・連想するイメージ（情景等）から ・書くところ（書いた人）を想像する →○書かれたもの（古典）を通して，その背後にあるものを感じとってみようと助言する。	10分	鑑賞の意義付け
2、3種の仮名古典の鑑賞 ① 各古典から感じたことを書く （資料A，資料B）	○「どんな内容でも可」「正解，不正解はない」「箇条書き，単語の羅列でも可」…等 多くの内容が自由に出されるよう促す。	15分	個別活動
3、古典名の特定 ① 4～5名のグループで古典名を探る ② 古典名決定の根拠を書く	○教科書を参考にして，古典名を特定してみるよう促す。 「特定」という作業をきっかけに，グループ内で，相互に「感じたこと」を話し合わせ，鑑賞を深めるようにする。 ○根拠を確認することで，「感じたこと」をより確かなものにするようにする。	15分	グループ活動

4、鉛筆による各古典の臨書	○次時の臨書学習に先立って，鉛筆でその形をたどり，形の特徴等を意識するよう助言する。 （資料への記入作業を優先させたいので，時間のとれない生徒は，鉛筆臨書は省略する。）	10分	個別活動

「要素」：本研究の成果検証のための比較対象授業として，この欄に掲げた内容を異にした授業をいくつか実施した。（内容の詳細は，第2節「比較クラスの設定」参照）

（3）評価

① 鑑賞の意義に気付き，仮名古典の美を味わうことができたか。

② 各古典について，その違いを感得し，自分なりの言葉で表現することができたか。

③ 話し合いを通し互いに鑑賞を深め合うことができたか。

第2節　比較クラスの設定

前節「(2) 展開」で提示したものは，先行の和田の授業展開を踏まえ，現在の状況で考え得る最も効果的なものという前提で取り組んだ。以下，この授業に含まれるいくつかの要素が，果たして，本当に効果的であったのか，を検証していくこととする。

そのため，相互比較の対象とするための授業を（本校の非常勤講師の協力を得て）4種類実施した。各々の内容は，第3章で示した「鑑賞活動を主とした授業」の「要素」（授業展開参照）を変えたもので，その内容は，以下の表の通り。

授業の仮称	授業担当者	鑑賞の意義付け	個別活動	グループ話し合い	備考	参考
「講師」	非常勤	無	有	無	（鈴木の小学書写クラスに相当）	［図9］
「個別」	鶴谷	有	有	無	終始，個別活動とした	［図10］
「集団」	鶴谷	有	無	有	終始，グループ活動とした	［図11］
「総合」	鶴谷	有	有	有	前節に示した授業展開で実施	［図12］

第3節　授業の成果

1．鑑賞の視点別分析結果

前節に提示した授業で得られた回答を，長崎大学の場合と同様，「実技性」「事実性」「判読性」「連想性」の観点から分析し，それに該当する記述が見られた場合を拾いだして集計し，グラフ化した。それが，［図9］［図10］［図11］［図12］である。また，［図13］は，臨書後に，学習者が書いた鑑賞文の内容を観点別に分析集計し，グラフ化したものである。

図９　純心高「講師」

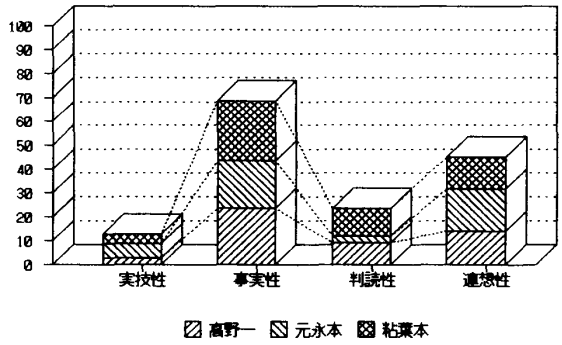


図10　純心高「個別」

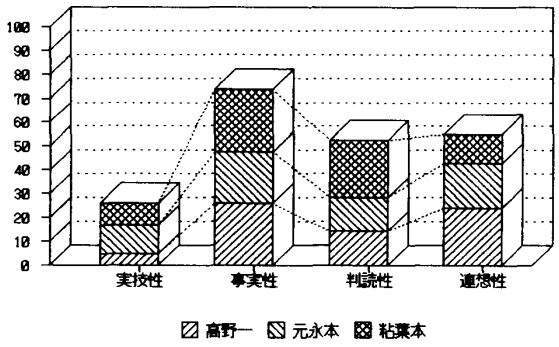


図11　純心高「集団」

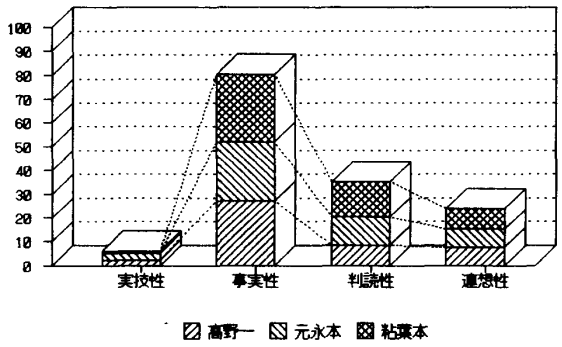


図12　純心高「総合」臨書前

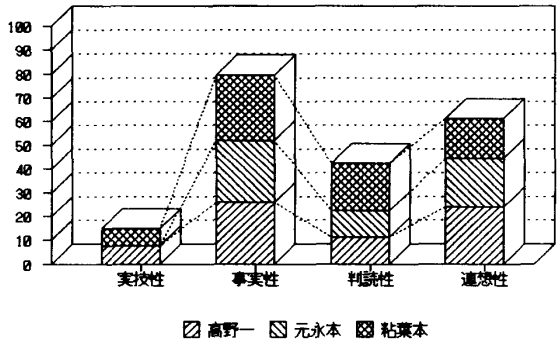


図13　純心高「総合」臨書後

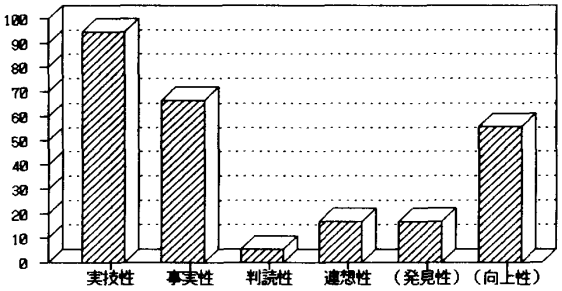


図14　臨書前後の比較（純心高「総合」）

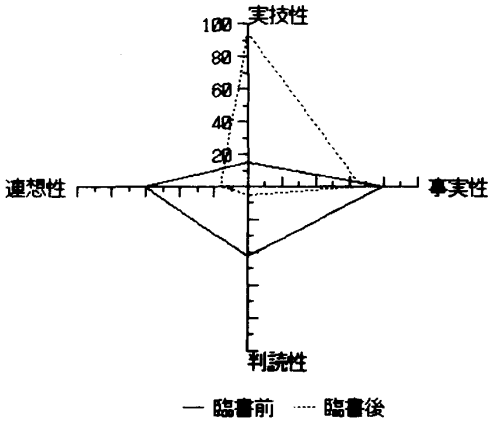


図15　鑑賞意義付けの有無（純心高）

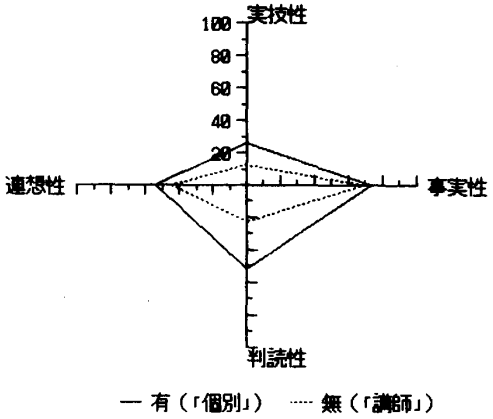
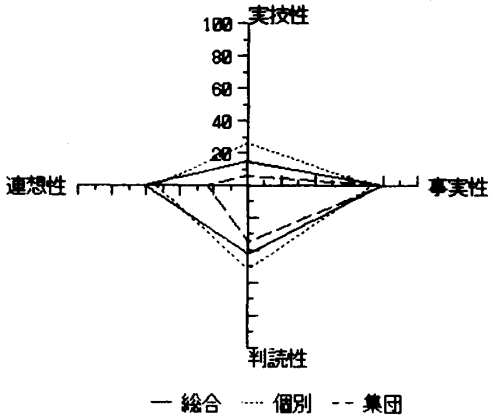


図16　話し合いの効果（純心高）



2．授業の成果

（1）集計結果に基づいて

・向上性の現れ…学習者自身の意識の向上を自覚した内容の記述を「向上性」としてまとめた。一方，「発見性」については，和田の授業（長崎大：仮名書法）に比べて，かなり低い。50分の授業内に，臨書作品を完成させた上で，その後に鑑賞文を書かせた為，時間をとれなかった学習者も多かったせいかと思われる。

・臨書活動による変化…［図14］に見られるとおり，実技性の上昇，連想性の低下という特徴は，長崎大「仮名書法」と同様である。臨書活動前の鑑賞活動の有効性がうかがえる。（［図３］と似た特徴が見られる）

・意義付けの有効性…［図15］は，純粋に「鑑賞の意義付け」の有無以外は，全て同条件とした２種の授業（「個別」「講師」）の出現率の比較である。各項目とも，意義付けがなされた方が，その出現率の高いことが読み取れる。

・話し合い活動の有効性…グループによる話し合い活動については，３種の授業を実施した。各々の鑑賞の視点の出現率を比較したものが［図16］であるが，予想に反して「集団」クラスの出現率が全体的に低い。一方，「総合」クラスと，「個別」クラスの比較では，唯一「連想性」のみ「総合」クラスが上回っている。授業担当者の実感として，対象とした学級の雰囲気の違いによるところも大きいと思われるのだが，同時に，「グループ学習」導入に関する重要な示唆を含むものと捉えることもできる。すなわち，グループ活動に先立っての個別学習が，十分になされていてはじめて「学習者の相互研鑽」が意味あるものになるということが読み取れる。個別活動との連携のない安易なグループ学習導入の危険性を示す結果である。

（2）授業担当者の印象として

今回の仮名古典の単元についての授業研究に先立って，１年生については，１学期の段階で，臨書学習の中に「鑑賞」を意識した学習活動も行った。その中で，学習者は，やはり，今回と同様，自由記述で「顔氏家廟碑」や「牛橛造像記」の印象を書いている。その時とは，諸々の状況も異なるので簡単には比較できないが，授業担当者の感触としては，一学期と比べ，今回の学習者の記述では，確実に古典を見る目の深まりを感じ取ることができた。

また，今回の単元では，創作課題（俳句の散らし書き）においても，提出物の余白に，「どのような作品にしたいのか」ということを記入させた。その際の記述内容は，ほとんどが，「もっと細い線をきれいに書きたい」とか「墨の量の変化をうまく出したい」，あるいは「＊＊という字の形をもっとかっこよくしたい」というような，実技性，事実性に含まれるような内容が多い中，「秋らしいほのぼのとしたふんいきを出したい」とか，「自然の川が流れるような作品にしたい」というような（連想性を重視したような）表現もいくつか見られるようになった。同じような手法を１学期の楷書創作でも実施したが，その際は，ことごとく実技性や事実性に基づく内容ばかりであったことを考えれば，今回の「鑑賞」学習によって，「想像力」をはたらかせるような鑑賞の視点が身に付き始めたと言える。

第４章　反省と課題

第１節　大学での実践について

１．授業計画の再構成

授業計画の実施に際しては，時間に迫られ，当初予定していた各古典の歴史的背景の知識面での理解等が不十分であった。また，最後の「短冊作品」の制作に際し，各学習者の作品鑑賞の機会を設けなかったことは，本授業の主旨からしても大いに反省すべきである。

２．個々の伸長に視点を置いた授業展開

本研究の対象となった授業においては，鑑賞と学習の記録という主旨から，毎回，必ず記名の上，何らかの提出物を課している。授業成果分析の素材となるものであるが，それは同時に個々の学習者の成長の記録でもある。今回の一連の授業では，こうした視点からの確認が不十分であったため，それを次回の授業展開に積極的に生かせなかったことを反省している。

３．今後の書道科授業に臨んで

今回の実践的研究は，長崎大学での授業のあり方を中心として考察してきたが，研究を進めるうちに，福岡教育大学書道科の場合においても，鑑賞を契機とし，「教える」から「学ぶ」へという視点での授業も必要であると考えるようになった。将来の高等学校書道科教師として，大学で培った授業に対する考え方がその授業に還元されることを期待したいからである。

第２節　高等学校での実践について

１．「鑑賞」の意義付けについて

まず，限られた時間内で，「鑑賞」についての十分な意義付けがなされなかったと思う。特に和田の先行授業において，教科書掲載資料やＯＨＣ資料が有効であったのに対し，鶴谷は発問のみで対応した。「鑑賞」の意義付けに関し，授業者自身，内容方法ともに認識が乏しかったといえる。そのため，学習者への浸透が今一つ及ばなかったことを反省する。

２．学習者への働きかけについて

今回，共同研究の一員として鶴谷は，安易に多年の経験にあぐらをかいたような判断や認識は，必ずしも正しくはないということ，教師の視点が変われば，今まで見えなかった

生徒の一面が見えてくること等，様々なことに気づかされた。

また，本研究を通して，改めて「授業改善」を目指した授業者の働きかけが，長期的に為されれば，必ず何らかの「応え」があることを確信するに至った。今後とも，「授業改善」を心がけ，よりよい授業を創造してゆく必要性を痛感している。

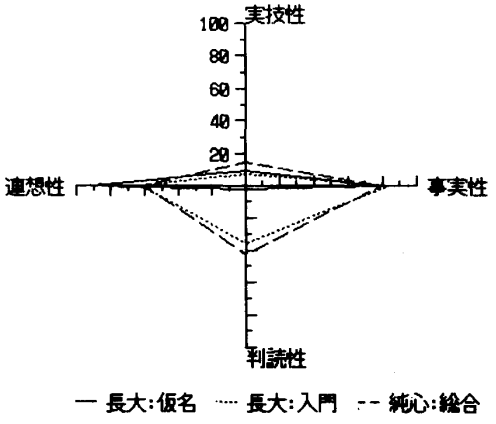
第3節　大学と高校との連携について

今回の実践研究では，第1章で述べた通り，「鑑賞」活動を効果的に授業の中に取り入れる為に，色々な試みがなされた。その結果を，なるべく，客観的に分析検討したつもりではあるが，あくまでその対象となる学習者は現実の「大学生」であり，「高校生」である。いうまでもなく，その両者には，学習経歴の差があり，また，同じ大学生（高校生）であっても，当然クラスによる個性の差や，意識の違いも大きい。それ故，本研究の結果が，果たして純粋に授業方法の違いを反映しているかどうかは，疑問の残るところであろう。例えば，［図17］は，基本的に同形態の授業（長崎大「仮名書法」，長崎大「入門科目」，純心高「総合」）の結果比較であるが，判読性や連想性では，かなりの差が認められる。勿論，違いがあって当然ではあるが，この違いが，何に起因するのかの検討は，今後の継続研究を待たねばなるまい。

また，学習者から回収した資料（鑑賞文等）の分析については，自由記述であるため，集計者による微妙な受け取り方の違いで，集計数値の変動が予想される。今後，学習者の自由な表現を妨げず，より客観的な処理ができるような分析・集計方法を検討しなければならない。

最後に，本共同研究の手順そのものが，「大学での教科教育研究が先行し，高校（小，中学校）の現場でそれを実践し，そこでの問題点や反省点を再び大学へフィードバックする」という循環したものであった。このことは，鶴谷にとって，大いに意義のあるものであったと思う。

図17　同形態授業比較



おわりに

本共同研究に関わった3名は，それぞれ立場は異なるが，それぞれの場の「実践者」として，目の前の学習者をどう伸ばしていくのかという点で一致し，書道授業の改善を求めて試行してきた。今回の試行では，学習者自身の学習成果よりも，学習者をとらえる授業者（自分自身）の目が変わったという点で，大きな成果があったと考える。

今後は，この目の前の学習者をどう伸ばすのかという問を持ち続け，この問を次第に焦点化していきながら，芸術教育としての書道授業の可能性を探っていくこととしたい。

〔資料A〕

鑑賞カード

各古典の第一印象を記し、最初の一行を鉛筆で臨書してみよう
また、ファイルの古典（A～C）を確認し、その根拠も検討してみよう

一年 8組 31番（氏名 ）

高野切第一種

（第一印象・根拠）
○細々しい感じ。若い女の人が書いたように思う。○字の所々が強くなっている
○字が細々しい所と強い所があったから。

者 可春 多
はるがすみたゝるやいづこみよしの、

ファイル記号 B

粘葉本和漢朗詠集

（第一印象・根拠）
○線もしっかりしていて力強いような感じ。○ひんがある若い男性が書いているような感じ。○まるみがあってやわらかな感じ。○何の文字が書いてるのかわかりやすい。
○線にまるみがあり線もしっかりしているから。

留可須 多 徒
はるがすみたてるやいづこみよしの、

ファイル記号 C

元永本古今和歌集

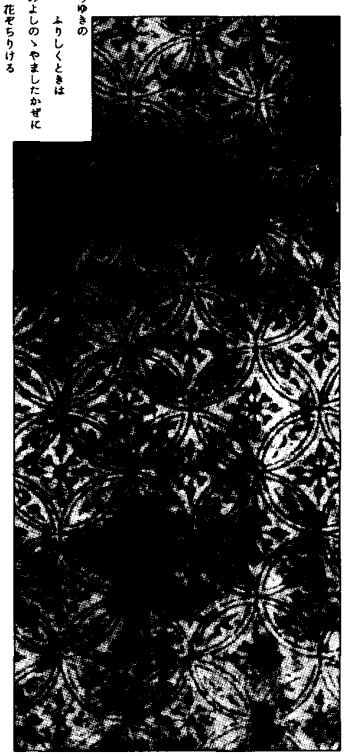
（第一印象・根拠）
○かどかどしい。○一つ一つの文字に感情がこめられているよう。○どういう言葉が書かれているのかわかりにくい。
○何という言葉を書いているのかはっきりしていないから。

者留可散三 留 見
はるがすみたゝるやいづこみ（よしのゝ）

ファイル記号 A

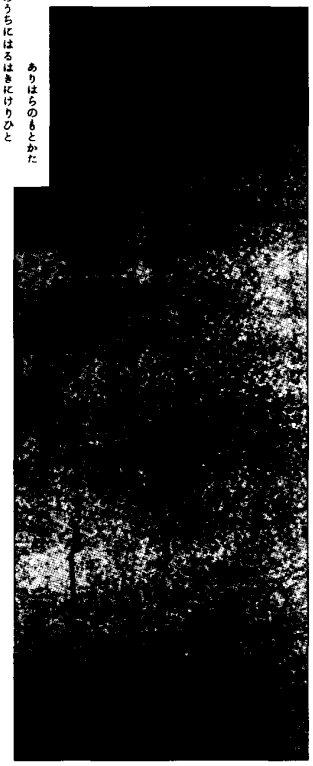
〔資料B〕

①



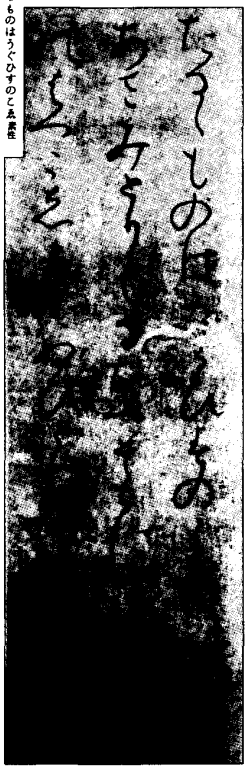
しらゆきの
よりしくときは
みよしのゝやましたかぜに
花ぞちりける

②



ありはらのもとかた
としのうちにはるはきにけりひと
ゝせをこぞとやいはむことしとやいはむ

③



たるゝものはうくひすのこゑ
あさみどりはるたつそらにうぐひす
のはつこゑまたぬひとはあらじな